

キジと仁清の藍^{あお}

新緑を迎えた四月，“国鳥，野生のキジを見に来ないか，一杯やろう”と誘われ千葉の印旛沼近くに住む友人宅を訪ねた．すぐに見つかるからと半信半疑，田園風景と印旛沼を見渡す野辺の細道を行くと，ここにいるとばかりに大きな鳴き声．振り向けばそこに雄キジはいた．キジといえばヤマドリかと，藪を出たり入ったりする茶色の鶏のような姿を想いうかべていたが，緑をバックにしたキジは遠目にみても目立ちすぎる．なんと派手ないでたちか．颯爽として古風な野武士のような感じもするが，どちらかといえば派手な衣装をまとって見得を切る歌舞伎役者か．



Photo by M.Takayama, 21Apr2022

さっそく双眼鏡を覗き，そして 60 倍ズームのデジカメで引っ張って見て，驚いた．頭部は鶏冠が垂れたような大きく鮮やかな赤の顔面の中心に鋭い眼と猛禽類のような嘴，首部は黒褐色から胸部の深い青緑へと続くグラデーションを持ったくすんだ紫，胸部にはだんだら模様を想わせる羽毛，背には黒と白そして茶と白からなるうろこ状の羽が重なり灰色といふし銀のようなふさふさした羽毛に連なり，その先の尾部には 50cm はあろう縞模様を配しまっすぐ伸びた尾羽．そういえば，だんだら模様の胸部の羽毛は古色蒼然とした配色．正面からのアップ姿はどこかで見た記憶があると思いめぐらすと，モーツァルトの魔笛に出てくる鳥役パパゲーノにそっくりだ．そうかパパゲーノはキジを真似たのかと笑ってしまう．モーツァルトのアイデアか劇場支配人または役者のアイデアか，どちらにしても人気のオペラの秘密の一端かもしれないことに納得．



野生のキジ（雄） Photo by M.Takayama, 21Apr2022

それにしてもキジの頭部から背と腹部までの配色を見た瞬間によぎったのは京焼の仁清だった。仁清には国宝の雉子の色絵香炉などがあり、その鮮やかだがくすんだような浅葱色（あさぎいろ）を見ると仁清以外にはないと想ってしまう。写真のキジにはその色（私が勝手に仁清の^{あお}藍と呼んでいる）がグラデーションの間にわずかに見られ、仁清は雉子の香炉を首から胸、腹、背にかけて重ねた一枚一枚の羽根の輪郭をその浅葱色と金に焼き上げている。浅葱色を多く持たないキジの配色を見て仁清を想起した理由は分からないが、その全体の古びた色合いだったかもしれない。とくに首部から胸部にかけてのくすみ具合（ここにわずかにある藍）が古さという風合いを感じさせてくれて良い。京焼は人目を惹く赤や金を多用し絢爛豪華で雅な色絵付けが特徴。仁清はその始祖にあたるが、平安から続く伝統の浅葱色に現代的な派手さはなく、仁清の焼き物を見分けるときにはこの色合い“仁清の藍”を見ることがにしている。仁清の焼き物の弟子にあたる尾形乾山にこの色合いがないのは、この色を入れてしまうと仁清になってしまうからだろう。独自性の問題だ。実際、キジの色合いから乾山を想起するのは難しい。乾山は大柄で抽象的な文様を特徴としてどちらかといえば現代調だ。キジの配色に藍を多く取り入れたのは、仁清が写実ではなく桃山人のような自由な発想と抽象性を合わせ持つ遊びの人だったのではないかと思わせる。遊び心はいつの時代も大事だ。



左：国宝 色絵雉子香炉 野々村仁清作（林家晴三 編：日本の美術 11, No.138, 至文堂, 東京 昭和 52 年, 第 19 図より），右：浅葱色（<https://irocore.com> 青色の色一覧より）